



# からしだね

2020年1月号  
(556号)

キリストの受難 カトリック池田教会

主任：ノノイ・プラザ神父

住所：〒563-0041 池田市満寿美町9-26

TEL：072-751-2400 FAX：072-753-4624

URL(ホームページ)：<http://catholic-ikeda.sakura.ne.jp/church/index.htm>



## 本号の記事の主題など

● 教皇のスピーチ 広島市平和公園にて

● 表紙の写真について

● 「生きよ！マリア」待降節の黙想会

● 長崎リポ - 教皇ミサ in 長崎2019 -

● 教皇ミサ(東京)に与って

● 日曜学校生、主の降誕の喜びを皆さんと

分ち合う 12月15日

● ドレミの会クリスマス 12月14日

● みんなの談話室

「なぜ私だけが苦しむのか現代のヨブ記」を読む

ラテン語による特別形式ミサに与って

● 川西のナイチンゲール

俳句

● 年間カレンダーに追加・変更された行事予定

● 大人の日曜学校だより 11月17日

## フランススコ教皇のスピーチ

広島市平和記念公園にて、2019年11月24日

「わたしはいおう、わたしの兄弟、友のために。  
『あなたのうちに平和があるように』」(詩編122・8)。

あわれみの神、歴史の主よ、この場所から、わたしたちはあなたに目を向けます。死といのち、崩壊と再生、苦しみといつくしみの交差するこの場所から。

ここで、大勢の人が、その夢と希望が、一瞬の閃光と炎によって跡形もなく消され、影と沈黙だけが残りました。一瞬のうちに、すべてが破壊と死というブラックホールに飲み込まれました。その沈黙の淵から、亡き人々のすさまじい叫び声が、今なお聞こえてきます。さまざまな場所から集まり、それぞれの名をもち、なかには、異なる言語を話す人たちもいました。そのすべての人が、同じ運命によって、このおぞましい一瞬で結ばれたのです。その瞬間は、この国の歴史だけでなく、人類の顔に永遠に刻まれました。

この場所のすべての犠牲者を記憶にとどめます。また、あの時を生き延びたかたがたを前に、その強さと誇りに、深く敬意を表します。その後の長きにわたり、身体の激しい苦痛と、心の中の生きる力をむしばんでいく死の兆しを忍んでこられたからです。

わたしは平和の巡礼者として、この場所を訪れなければならないと感じていました。激しい暴力の犠牲となった罪のない人々を思い出し、現代社会の人々の願いと望みを胸にしつつ、じっと祈るためです。とくに、平和を望み、平和のために働き、平和のために自らを犠牲にする若者たちの願いと望みです。わたしは記憶と未来にあふれるこの場所に、貧しい人たちの叫びも携えて参りました。貧しい人々はいつの時代も、憎しみと対立の無防備な犠牲者だからです。

わたしはつつしんで、声を発しても耳を貸してもらえない人々の声になりたいと思います。現代社会が直面する増大した緊張状態を、不安と苦悩を抱えて見つめる人々の声です。それは、人類の共生を脅かす受け入れがたい不平等と不正義、わたしたちの共通の家を世話する能力の著しい欠如、また、あたかもそれで未来の平和が保障されるかのように行われる、継続的あるいは突発的な武力行使などに対する声です。

確信をもって、あらためて申し上げます。戦争のために原子力を使用することは、現代において、犯罪以外の何ものでもありません。人類とその尊厳に反するだけでなく、わたしたちの共通の家の未来におけるあらゆる可能性に反します。原子力の戦争目的の使用は、倫理に反します。核兵器の保有は、それ自体が倫理に反しています。それは、わたしがすでに2年前に述べたとおりです。これについて、わたしたちは裁きを受けることになります。次の世代の人々が、わたしたちの失態を裁く裁判官として立ち上がるでしょう。平和について話すだけで、国と国の間で何の行動も起こさなかったと。戦争のための最新鋭で強力な兵器を製造しながら、平和について話すことなどどうしてできるでしょうか。差別と憎悪のスピーチで、あのだれもが知る偽りの行為を正当化しておきながら、どうして平和について話せるでしょうか。

平和は、それが真理を基盤とし、正義に従って実現し、愛によって息づき完成され、自由において形成されないのであれば、単なる「発せられることば」に過ぎなくなると確信しています。(聖ヨハネ23世回勅『パーチェム・イン・テリス——地上の平和』37〔邦訳20〕参照)。

真理と正義をもって平和を築くとは、「人間の間には、知識、徳、才能、物質的資力などの差がしばしば著しく存在する」(同上87〔同49〕)のを認めることです。ですから、自分だけの利益を求め、他者に何かを強いることが正当化されてよいはずはありません。その逆に、差の存在を認めることは、いっそうの責任と敬意の源となるのです。同じく政治共同体は、文化や経済成長といった面ではそれぞれ正当に差を有していても、「相互の進歩に対して」(同88〔同49〕)、すべての人の善益のために働く責務へと招かれています。

実際、より正義にかなう安全な社会を築きたいと真に望むならば、武器を手放さなければなりません。「武器を手にしたまま、愛することはできません」(聖パウロ6世「国連でのスピーチ(1965年10月4日)」10)。武力の論理に屈して対話から遠ざかってしまえば、いっそうの犠牲者と廃墟を生み出すことが分かっているながら、武力が悪夢をもたらすことを忘れてしまうのです。武力は「膨大な出費を要し、連帯を推し進める企画や有益な作業計画が

滞り、民の心理を台なしにします」(同)。紛争の正当な解決策として、核戦争の脅威による威嚇をちらつかせながら、どうして平和を提案できるでしょうか。この底知れぬ苦しみが、決して越えてはならない一線を自覚させてくれますように。真の平和とは、非武装の平和以外にありえません。それに、「平和は単に戦争がないことでもなく、……たえず建設されるべきもの」(第二バチカン公会議『現代世界憲章』78)です。それは正義の結果であり、発展の結果、連帯の結果であり、わたしたちの共通の家の世話の結果、共通善を促進した結果生まれるものなのです。わたしたちは歴史から学ばなければなりません。

思い出し、ともに歩み、守ること。この三つは、倫理的命令です。これらは、まさにここ広島において、よりいっそう強く、より普遍的な意味をもちます。この三つには、平和となる道を切り開く力があります。したがって、現在と将来の世代が、ここで起きた出来事を忘れるようなことがあってはなりません。記憶は、より正義にかなない、いっそう兄弟愛にあふれる将来を築くための、保証であり起爆剤なのです。すべての人の良心を目覚めさせられる、広がる力のある記憶です。わけても国々の運命に対し、今、特別な役割を負っているかたがたの良心に訴えるはずです。これからの世代に向かって、言い続ける助けとなる記憶です。二度と繰り返しません、と。

だからこそわたしたちは、ともに歩むよう求められているのです。理解とゆるしのまなざしで、希望の地

平を切り開き、現代の空を覆うおびただしい黒雲の中に、一条の光をもたらすのです。希望に心を開きましょう。和解と平和の道具となりましょう。それは、わたしたちが互いを大切に、運命共同体で結ばれていると知るなら、いつでも実現可能です。現代世界は、グローバル化で結ばれているだけでなく、共通の大地によっても、いつも相互に結ばれています。共通の未来を確実に安全なものとするために、責任をもって闘う偉大な人となるよう、それぞれのグループや集団が排他的利益を後回しにすることが、かつてないほど求められています。

神に向かい、すべての善意の人に向かい、一つの願いとして、原爆と核実験とあらゆる紛争のすべての犠牲者の名によって、心から声を合わせて叫びましょう。戦争はもういらない！ 兵器の轟音はもういらない！ こんな苦しみはもういらない！ と。わたしたちの時代に、わたしたちのいるこの世界に、平和が来ますように。神よ、あなたは約束してくださいました。「いつくしみとまことは出会い、正義と平和は口づけし、まことは地から萌えいで、正義は天から注がれます」(詩編85・11-12)。

主よ、急いで来てください。破壊があふれた場所に、今とは違う歴史を描き実現する希望があふれますように。平和の君である主よ、来てください。わたしたちをあなたの平和の道具、あなたの平和を響かせるものとしてください！

「わたしはいおう、わたしの兄弟、友のために。『あなたのうちに平和があるように』」(詩編122・8)。

### 表紙の写真について

教皇フランシスコが11月23日から26日に訪日された。74年前に初めて戦争手段として原子爆弾(核兵器)が使われて多くの人々が命を奪われた広島市と長崎市を訪れた教皇は、そのおぞましい記憶が人類に永遠に残るようとミサを捧げ、スピーチ(広島市の平和公園でなされたのは巻頭記事として収録されている)された。

24日に、多くの人々と共に教皇フランシスコが長崎県営野球場に姿を現すのを待っていた日曜学校の五年生S.M.さんはパパモーターに乗って近づいて来る瞬間を逃さずに教皇の姿をズームレンズ付きのカメラに収めた。それが表紙の写真です。池田教会から教皇ミサ(ミサ)に参列されたワイアトリクスI.T.さんの感性溢れる体験記(本誌8ページ)と教皇ミサ(東京)に与ったR.H.さんの深みから湧き出した思い(本誌9ページ)も読む人の心を打つ。

(T.O.)

## 「生きよ！マリア」

待降節を迎えての黙想会（11月24日）

箕面教会主任司祭 矢野吉久神父



神父になった頃神戸の海星女子学院小学校のマリア様の行事に呼ばれて行ったとき一年生から六年生までが力をあわせて描いた大きなマリア様の絵がありました。それは巨大な太ったマリア様（京塚昌子のような）の絵でわたしはそれを見てうれしくなりました。

わたしのイメージとピッタリだったからです。

## 受胎告知（マタイ1章～2章・ルカ1章～2章）

亡くなられた聖路加国際病院名誉院長の日野原重明先生が数年前朝日新聞に連載をされていました。先生は、ビートルズの“Let it be”は、マリア様のお告げのことだと書かれました。宗教的背景がない日本では「なるようになる」と訳されましたがそうではなく「あるがままに受け入れます」というのマリア様の生き方です。日野原先生は歌詞をこう翻訳されました。

私が問題をかかえた時

メアリ母ちゃんがあらわれて

かしこいことばを言ってくれる

あるがままに受け入れなさい

そしてわたしが落ち込んだ時

彼女は私の前に立ち

かしこい言葉をいつってくれる

あるがままに受け入れなさい

世界中の失意の中のひとたちが

同じような気持ちでくらしている

これが答えになるだろう

あるがままに受け入れなさい

12, 3歳の貧しい少女が身ごもるということは、ヨセフに信じてもらえるかどうかもわからない、ふしだらな女というわさにもなりかねない状況でしたがその中でのLet it beでした。受胎告知によってマリア様の人生は大きく変わりました。マリア様は、道具として一方的に神に選ばれたのです。

何でこんなことがという事はいっぱいあります。現代版ヨブ記のような人もいます。わたしも実際に何

人か知っています。それに対する答えはありません。「ありのままに受け入れます」それを切り開いたのがマリアです。

冒険、adventure、ということばがありますがその語源は、advent（待降節）です。それは、何かが突然おこること、突然思いもかけないことが生じること。マリアの冒険が始まったのです。マリアは信じて受け入れたのです。母マリアとともにわたしたちは待降節をすごします。

イエスさまが生まれたときヘロデは、二歳以下の子どもを皆殺しにしました。救い主としてうまれたばかりにとぼつちりで殺された子どもがいます。なぜですか？素朴な疑問です。答えはありません。マリアとヨセフは、殺された子どもの親の視線を感じながら生活したのです。聖路加国際病院の小児科医だった細谷亮太さんがつぎのように書かれています。「救い主としてうまれたばかりにたくさんの罪のないあかちゃんが殺された事実を知りながら育たなければならなかったイエス。殺されたあかちゃんの家族の悲しみと怒りを感じながらイエスを育てたマリアとヨセフ つかつたろうと心底思った。」

## 難民だったマリア

ある神父が、「マリアは、エジプトの難民キャンプにいたんだよね」といいました。自分の国を追われた、そういう姿のマリアなのです。

## 十字架の下に立つマリア（ヨハネ19・25～27）

マリアは、死刑囚の母だったのです。いまでも、犯罪者の家族にたいして世間の目はきびしいです。マリアは、未婚の母、犯罪者、難民、そのひとりたちの側にいます。そのマリアに、生きよ！マリアと神は言われるのです。そのあとにわたしたちは、ついていくのです。

## 教会の母マリア

マリアは、教会誕生の時弟子たちと祈っていました。初代教会には、姦通の女、ニコデモ、ザアカイ、盲人、等々がいました。わたしたちも、マリアを先頭に続いていきます。「生きよ！マリア」。そこにじぶんの名前を入れてください。

神様に下駄をあずけて生きる生き方。それをわたしたちに先がけて生きてくださったのが母マリアです。

研修委員会

## 長崎リポ - 教皇ミサ in 長崎2019 - ウィアトリクス I.T.

『皆さま！只今教皇フランシスコが、大司教館をご出発なさいました！』場内放送に、今すぐご入場？と期待した私たち。「今、ご出発なら、まだやな…」期待が苦笑に変わったその瞬間、後方から悲鳴にも似た歓声！何が起こったのかわからず動揺しましたが、すぐにパパモービレの白い枠が見えました。さっきの放送は、パパ様ジョーク！「パパ～ッ！」ご登場に、県営球場は一瞬で熱気に包まれました。バックスクリーン大型ビジョンには、赤ちゃんに祝福のキスをされるパパ様が。ひときわ大きな喜びの声が上がりました。



長崎は11月24日の朝から雷雨で、参加者は合羽姿で会場に。少しずつ晴れ間が広がり「パパ様のおかげで、晴れた！」皆、ロ々に喜びました。一転、御ミサ中は、ガラガラと照りつける日差しが目、顔に痛い痛い！ベールの間からパパ様を見上げました。来日テーマは『すべてのいのちを守るため』。「さあ、どう生きるの？」パパ様はたくさんの愛と問いを投げかけてくださいました。御高齢にもかかわらず、しっかりと私たちに語りかけてく



ださるお姿に、このうれしさと痛みを一生忘れないでおこう、と思いました。

長崎は、キリスト教にとって特別な土地。私のイメージは、映画「沈黙」のごとく暗く厳しいものでした。「なぜ長崎の人たちは信仰を貫いたのだろう？」「私も、命をかけられるだろうか？」「長崎で、その答えを見つけることができるだろうか？」そんな疑問を胸に、前日、長崎入りしました。空港からレンタカーで島原へ。島原城で実物の踏絵を見て、胸が締めつけられました。長崎中町教会主日ミサにも与ることができました。

当日、神様から私への素晴らしいプレゼントが！会場への路面電車、途中の駅から首から入

場証を下げた小グループが。「ご一緒やな」と思っていると、その方々が私を見て「あ！津田さん！？」と。2年前、主人が大分県に単身赴任中、会いに行っていた時に、御ミサに与った「カトリック大分中津教会」の皆さんでした。長崎の、それも路面電車の中でお会いできるなんて！私のことを覚えていてくださったなんて！平和公園駅までの短い時間でしたが、中津教会の神父様始め、大分の皆さんの近況をお聞きすることができ、本当にうれしかった！

会場は大変な混雑でしたが、車椅子や杖の高齢者を気づかう声かけや、出会いを喜びあう声がたくさん聞かれました。一緒に入場待ちをしていた長崎県大村市の方は、パパ様のお迎えに着物で長崎空港に出向いたこと、知人のお嬢様が花束を渡す役でうれしかったことを話してくださいました。隣席は豊中教会、後ろは東京と札幌の方で、長崎で集えたことに感謝しました。黄色いジャンパーの地元長崎のスタッフさん達と、喜び合いました。学生ボランティアさん方も、とびきりの笑顔で対応してくれました。

翌日、世界遺産・外海(そとめ)の出津(しつ)教会・旧大野教会堂・黒崎教会へ。旧出津救助院では、シスターと現地ボランティアさんにご案内いただきました。当時最先端のオルガン・ハルモニウムや美しいホスチア焼器を見て、約150年前のド・ロ神父さまの愛と行動力に驚きました。「ド・ロ神父さまは、この出津を本当に気に入って、愛してくださいましたのよ。とても楽しい方だった、と伝え聞いていますよ」シスターのお話に、暗く厳しいだけのイメージが変わっていきました。

今年、池田教会の皆さまに受け入れていただきました。御ミサやアルファ・コースで共に祈り、喜び、時には不安をも分かちあう充実した日々。この「神様との出会い」を、私はもう、無かったことには決してできない。長崎の人々も、そんな気持ちだったのでは…？そして、その土地で、神様と共に、精一杯生きること。それこそが「すべてのいのちを守る」ことにつながるのでは…？たくさんのヒントを得た気がしました。

レンタカーを返却し、長崎空港までの送迎車中での、運転手さんの言葉が忘れられません。「長崎を選んでくれて、ありがとう」私こそ、感謝の3日間でした。パパ様からいただいた問い、そして自分自身の疑問を解くために、日々を大切に生きていこうと思います。そして、長崎に、また行きたいです。

## 12月25日 教皇ミサ(東京)に与って

R.H.

カトリック信仰は生まれたときから家族のもので、ミサに与ることは守るべき習慣でした。信仰教育が厳しく、思い返せば決まりごとをこなすだけの受身の子供だったと思います。それでも、敬愛の念を込めて教皇をパパさまと呼び、信仰上の支えであり正義とらえ育ったことに間違いはありません。

カトリック教徒であるならば、教皇によるミサに参列することはまたとない巡り合わせで、その場にいる恵みに感謝しました。長崎へ旅をしたおりに触れた、250年間ミサを熱望した禁教時代の人々を思うに、世界中へ同時配信される現代のミサ、彼らが想像さえできなかった瞬間に立ち会うことができたのです。

教皇入場とともに始まる霊性、大画面に映し出されるその姿に厳かな緊張が行き渡りミサ典礼が進みました。六カ国もの言語による共同祈願はこの国に生きる多様な人々とつながっていることを示していて、私たち日本の信者が少数派だと片付けられない時代に入ったのを気付かされます。

教皇はカトリックが抱える悩み苦しみを一身に受け、老いてもなお、世界の国々に毅然とメッセージを送り、神の使者として責任を果たされています。

幸運にも自由に信仰表明できる国に生かされていて、いのち尽きるまでどのように教えに向き合うのか、この一過性の興奮に浸るのではなく信仰の道を見つめ直そうと思います。他者が望む奉仕に重きを置きながら。



11月25日 教皇ミサの会場(東京ドーム)にパ  
パモービレで入場する教皇フランシスコ。写真はノイ神父提供。



教皇ミサ(東京)の会場中央の赤絨毯の上を  
白色の司祭団が入場中に高い位置からJ.O.さ  
んが撮影された。



東京ドームでの教皇のミサに、日本で奉仕してい  
るフィリピンの司祭(修道会はさまざま)が多く参加  
していました。ノイ・プラザ神父は前列右端に。

## 日曜学校生、主の降誕の喜びを皆さんと分かち合う……………教会クリスマス会

12月15日は日曜学校の子どもや中高生たちと過ごすクリスマス会でした。カール会館一階ホールに用意した座席を埋め尽くすほどたくさんの方にご参加いただき、ありがとうございました。

当日は、生徒を代表して小さな子供たち二人が声を合わせて、世界の平和を願うお祈りを唱えることから始まりました。(写真1)

プログラムは例年とは少し趣向を変えて、トップバッターは保護者とリーダーによる朗読「うまやのクリスマス」。グロックンやコーラスでの「しずけき」で前後を彩りながら、静かな聖夜の出来事をゆったりとした大人たちの朗読で味わいました。(写真2)

2番手は5・6年生クラス。普段からエネルギー溢れる元気なメンバーばかりですが、一人ひとりが好きな聖書の言葉を、事前に描いた絵を指し示しながら教えてくれました。会場の皆さんも巻き込んだグロリアの合唱も素敵でした。(写真3)

3番手は幼稚園・1年生クラスの聖劇です。ちょっぴり恥ずかしがりながらも、マリアとヨゼフ、天使、羊飼いや博士の役を楽しそうに演じてくれました。きれいな衣装やリーダーの演じてくれた一つ星の演出もあり、小さな子供たちによる微笑ましいひと時でした。(写真4)

そしてお次は初聖体クラスの「せいなるよるはおおさわぎ」。楽しい絵本のスライドを映し出しながら、順番に元気な声で朗読してくれました。スライドの絵にぴったりの効果音も、コミカルな宿屋の主人の目線から描く幸せなイエス様の誕生の場面を大いに盛り上げてくれました。(写真5)

5番手は3・4年生クラスによる劇「だれが鐘をならしたか」。たくさんセリフを覚えるのは大変だっ

たと思いますが、どんな煌びやかな贈り物よりも困った人に尽くそうとする心をイエス様がお喜びになることを、リーダーのナレーターにも助けられながらみんなで楽しく力を合わせて演じてくれました。(写真6)

日曜学校のクラスごとの出し物を締めくくるのはやはり中高生たちによる英語朗読。今年は「マタイによる福音書」でした。難しい単語や少し長いセンテンスもありましたが、普段の練習の成果を発揮していました。発表後の自己紹介も英語でしたが、自分の好きな趣味や習い事などを簡潔に教えてくれました。(写真7)

各プログラムの合間には、リーダーたちが代わるがわるにミニゲームやクイズ、リズムカルな手打ち遊びで子供たちはもちろん観覧の大人たちも楽しませてくれました。(写真8)

鈴やタンバリンを鳴らしながらみんなで「ジングルベル」を歌った後はお待ちかねのサンタクロースの登場です！プレゼントを頂いてから、みんなにホットドックや飲み物が配られてのランチタイム。子どもたちの出し物などを話題にしながらの団らんを楽しみ、最後にノイ神父さまから美しい歌声と祝福を頂いて、お開きとなりました。(写真9)

毎年のことですが、このような素晴らしい時間を通して、子どもたちは皆、イエス様の誕生の喜びを参加された皆さんと分かち合うことができます。お集まりいただいた皆さん、そして美味しい食事の準備やお世話、会場の飾りつけや機材の設営、プログラムの司会進行や事前の子どもたちへの練習指導など、教会をあげて子どもたちを見守り支えてくださっていることに心から感謝いたします。これからもよろしく願いいたします。



写真1 子ども二人で世界平和を願い、祈る。



写真2 保護者とリーダーが「うまやのクリスマス」を朗読。

## ドレミの会のクリスマス会 12月14日

12月1日(日)は池田市の、市政80周年を記念し、文化会館小ホーで10年ぶりに「さざなみコンサート」が開かれました。小さくてもホールでの演技はみんなの胸をドキドキさせます。「ドレミの会」は客席を巻き込んでの楽器演奏、歌、ダンスと頑張りました。お母様たちも同じユニフォームを着て加わってくださり「ワン・チーム」となって素晴らしいステージを作ることができました。普段、聞くことのないオペラ歌手の演奏など、楽しい一日でした。

12月14日は、待ちにまったクリスマス会です。

ホールの飾りを見ただけで心がわくわくします。障害を持った方々、保護者の皆さんで、ホールはすぐにいっぱいになりました。

「せつばく座」の楽しい人形劇、大西さんと6人の方の美しいギターの演奏、タップダンス「じだんだ」の演技には体験コーナーもあり、皆賑やかにステップを踏みました。ダンスの最後に松下さんのお孫さんの公平君が飛び入りで「U・S・A」を歌い

踊りだすと、みんな立ち上がり「U・S・A - U・S・A！」とホール割れんばかりに、歌い踊りまわりました！

クライマックスのサンタ登場になると、みんな目を輝かし、自分の名前が呼ばれるのをドキドキしながら見つめていました。目の不自由な子も、車いすの子も、やっと歩くことのできる子も名前を呼ばれると、手を挙げ大きな声で返事をし、嬉しそうにサンタさんと握手です！プレゼントの袋をうれしそうに持って～～笑顔がいっぱい！

池田教会の皆様の溢れるほどのプレゼントのご寄付のお陰で、社会では差別される彼らと大きな喜びの時間をともに過ごすことができました。また、何かにつけて、惜しみない優しさで、彼らによりそい。彼らとともに過ごしてくださっている、スタッフの皆さんにも、常に感謝です。来年は始まってから29年目に入ります。神様がお望みの場であるのなら、きっと楽しい集いは続くことでしょう。ありがとうございました。

ドレミの会

## みんなの談話室

4編が投稿順に12ページまで

H.S. クシュナー著<sup>1)</sup>

「なぜ私だけが苦しむのか現代のヨブ記」を読む

N.S.

「全能の父である神を信じます」—信仰宣言の一節。「全能」だといつも信じてますか？毎日元気でしあわせならいい。全能の神をたたえられる。しかし順風満帆の日々がいつもつづくわけではない。むしろ逆じゃないか。うまくいかないほうが多いくらいかも。するとたちまち頭をもたげてくるのは「神さまはほんとうに全能か」……

教えをまもって神と隣人を愛し、「よい信者」として暮らしている自分が逆境におちいる。解決困難な苦しみをあじわう。「こんなに神さまの教えを守っているのに私がなぜ……」悪いことをする(してきた)人が苦しんだとしても、それは自業自得で神さまの「おしおき」くらいで納得してしまうのに、自分のこととなるとそうはゆかない。すべてのできごとに神の意志がはたらくのなら、教えを守る自分をご存じのはずの神はなぜこのような試練を与えられるのか。なぜよい人を苦しめるのか？これが『ヨブ記』以来繰り返されてきた全能の神をめぐる謎である。

ひとつのヒントをこの本は与えてくれる。「神はまった

き善ではあるが、全能ではない。すべてをつかさどることはできない。そのような神を信じるわれわれができることは、起きてしまった過去の不幸にとらわれることではない。そうではなくて、その不幸をどう克服するか将来をこそ見つめ行動することだ。そうすれば神への信頼は時間とともに回復し、いつそう強い信仰をもてるようになる」—これがクシュナーのメッセージである。

「神はまったき善ではあるが、全能ではない。」とユダヤ教のラビであるクシュナーが語るようになったのは、ひとえに個人的体験による。かれは長男を一四歳のとき「早老病」でうしなった。一歳で髪が抜けはじめた長男は三歳で発症、成長しても身長一メートル、子供のうちから小さな老人の姿でしか生きられなかったのである。一〇年の命だろうという医者のお見どおりの人生となった。

我が子のみじめな一生を親としてどう受けとめるのか。そこにどのような神のメッセージが含まれているのだろう—最愛の子をわかくして失うという、おなじ体験をもった信者たちとの交流のなかで、クシュナーは自問を繰り返す。彼自身が現代のヨブとなって、この本を書いている。多くの読者を想定してはなかった、と本書は冒頭で語る。しかし、亡くなった我が子の鎮魂ばかりか、みずからの信仰と

のかかわりのなかで彼の死の意味を探ろうとするクシュナーの試みは、世界中のおおくの人たちの共感を呼んだ。訳文はこなれていて読みやすい。

1) H.S. クシュナー著、斎藤武訳 岩波現代文庫

## ラテン語による特別形式ミサに与って

D.M.

最近ラテン語の特別形式ミサに興味をもち、海外国内で何回か与らせていただきました。特別形式ミサの経験をとおして大きな御恵みを頂き、そこで感じたことを他の信徒と分かち合いたいと思います。

“Introibo ad altare Dei.”

(イントロイボ・アッド・アルタレ・デイ、「私は、神の祭壇に上ろう」) - 詩編42. 4、ヴルガータ訳

上の言葉、「私は、神の祭壇に上ろう」、は特別形式ミサを始める司祭の祈りから引用しています。

特別形式ミサ(「トリエント・ミサ」とも「伝統的ラテン語ミサ」とも言う)とは、現在用いられている新形式ミサが導入された1969年まで世界中のカトリック教会で一般的に行われた、ラテン語で唱えられた御ミサの典礼形式です。特別形式ミサは、1570年に教皇聖ピオ5世により標準化されて、イエス・キリストとその弟子が形成した伝統、またはもっと昔の伝統がその由来です。

現在、各国語で唱えられる新形式ミサが一般的に用いられていますが、特別形式ミサは今でもカトリック教会に認められています。

特別形式ミサの構造は新形式ミサと同様で、多くの祈りは新形式とほとんど同じです。しかし、ラテン語を使用している以外にもいくつかの違いがあります。次の三点です。①祭壇が十字架の下で聖堂の奥の壁に置かれている、②祭壇の反対側から対面する代わりに、司祭と信徒が同じ方向で祭壇に向かっている、③司祭が殆どの祈りを信徒に聞こえない小さい声で唱える。

その違いの理由は、新形式ミサがキリストとその弟子の最後の晩餐をイメージして形成されたのに、特別形式ミサがキリストの十字架上のいけにえをイメージして形成されたからです。実は、どちらの形式においても、2つの出来事、最後の晩餐と十字架刑死によるいけにえ、が記述されています。

新形式ミサの参加者が司祭と一緒に祈り歌って司祭の祈りを聞くことに対して、特別形式ミサの参

加者は、司祭が一部沈黙で祈ることを待ちます。すなわち、特別形式ミサの参加は沈黙の黙想です。われわれの忍耐強い注意力は、司祭が目の前の祭壇で再現している主イエスの御体と御血の十字架上のいけにえとともに、神様に捧げる贈り物になります。これこそ教会と人生の一番深い、一番感動的な神秘です。新形式ミサでも経験できますが、私にとって特別形式ミサではその経験が生々しく衝撃的でした。

御ミサに初めて参加する人にとっては、国語で唱えられて、信徒の役割が活発的で、司祭との関係が暖かい新形式ミサが分かりやすいです。しかし、特別形式ミサは年上の信者にとって懐かしく、世界中の多くの若い信者がその深い霊性と御恵みに気づいています。すべてのカトリック信者は一度特別形式ミサにあずかれば、教会の伝統および典礼と祈りの理解が深まり、われわれの大祭司、救い主、創造主であるイエス・キリストに近づくでしょう。

ウナ・ヴォーチェ・ジャパンは特別形式ミサを守ること、分かち合うことを通して神様とその教会を奉仕するカトリック信者の団体です。現在、特別形式ミサを捧げる司祭が不足しているため、御ミサを定期的に計画できません。しかし、今後ウナ・ヴォーチェ・ジャパンが各地で計画する特別形式ミサについて案内を希望する方は、ホームページを通してご連絡ください。 <https://uvj.jp/>

## 川西のナイチンゲール

大山



肝臓がんの手術を8月にしました。1ヶ月も経たないうちに、奥の方に、またしても腫瘍が発生。こちら後2、3年で日本の男子の平均寿命に達する歳です。寿命としては、文句はないのですが、キリスト様

に見えるまでに、後ひと山超さねばならない苦痛を想像。「またか」とがっかり。手術は体力が激減しま

すので、医師は別の方法で治療してくれるだろうと思っていました。しかし診察の時に主治医は(無慈悲にも?)宣告したのです。

「医師団でカンファランスをした結果、あなたには、まだ手術をする体力があると判断しました。今のままで放置するのはもったいない。もう一度手術して、完治を目指したらどうですか」。

迷いましたね。たとえ手術して良くなったとしても、その後、体力消耗でベッドに寝たきり。生ける屍になるのは、かないまへんがな。いえ、もし厭ならお断りしてもいいのです。これは「カトリック教会のカテキズム」にも書かれている患者の権利です。選択の決断は、最終的には、私がしなければなりません。苦痛を引き受けることも含めて。

聖人たちの書物から方針を探しました。結局、従来通り、十字架の聖パウロの勧めに従いました。

「病気に關しては、あらゆることにおいて医師に従順でありなさい。処置を拒んではなりません」(「神のみこころの中で」ドンボスコ社刊、77頁)。

約3ヶ月後の11月上旬に、また手術。今年に入って4回目。そこで作戦を立てました。第一に神様のお恵み。病者の秘跡と聖体の秘跡を出来る限り受ける。神様のお恵みさえあれば、死んでもいいのです。きっと天国に導いてくださいます。さて手術の当日。この日はかえって楽なんです。麻酔が効いていますから、無意識の状態。ところが麻酔が切れる翌日あたりから傷がジクジクと痛み出す。そこで麻酔薬が投入される直前に、「十字架の聖パウロ、私のためにお祈りください」。深淵に突入する覚悟で昏睡状態に入りました。

手術は終了。傷の痛みを感じながらベッドに寝ていると、若い看護師さんが来ました。

「来年、螢池の医療専門学校を卒業する3年生です。卒業実習で、この病院に来ました。しばらくあなたの看護をさせてください」とのこと。

彼女は私と話すときは立ったままではなく、しばしばベッドの側で膝を折って話しました。体温、血圧、体重の測定にも念入り親切。指導の任に当たっていた先輩の看護師さんが申しました。「実習生のお相手していただいてありがとうございます」と。「いえいえ、気が合う人で良かったですわ」と私。

体を拭いてくれたときは感動しました。手術前後の2、3日は風呂に入っていません。彼女は指導の看護師さんと2人で、熱くしたバスタオル4枚で、頭から足先まで隅々を拭いてくれました。またベッドで上布団を掛けるときも、きっちりと隙間なくかけてく

れたのです。手術の傷の痛みで、寝返りを打つのが大変。上布団を十分被れず、寒い思いをすることがありました。ベテランの看護師さんは、「これくらいは、ご本人自身で出来るだろう」と思うのでしょうか。そこまでは気づかず、また私の方もお願いするのを遠慮がちでした。

彼女は、そんな点まで、きっちりとしてくれたので、私は心の奥で深く感動。ふと思い出したのです。川西の公園にあるナイチンゲールの像を。

この像を知ったのは5、6年前でしょうか。「こんな所に、何でナイチンゲール像があるんやろ」と興味を抱き見物に行きました。阪急雲雀丘花屋敷駅と川西能勢口駅を結ぶ線路沿いの公園にありました。雲雀丘花屋敷で降りて、川西能勢口の方に向かって歩いたのを覚えています。なんでも大阪日赤病院で手厚い看護を受けた方が感動、はるばるロンドンまで行って、ナイチンゲールの像を調べて日本に持ち帰り、ここに立てたそうです。

私は、この実習生に何かお礼をしたいと思いました。彼女は、この像を知りませんでしたので、「この像の経緯を書いて、お送りしたい」と申しましたら彼女は「上司の許可を得てからにしてください」と。以来話は立ち消えに。ナイチンゲールの教えにも、看護師に公私混同を戒めている点があったようです。退院間際には、私と家内を丁寧な笑顔で見送ってくれました。

さて退院後、自分の記憶を確認するために、インターネットで調べてみました。検索の言葉は「川西ナイチンゲール」です。川西市観光協会などのHPに出てきました。銅像があるのは、栄根寺廃寺史跡公園といいます。脇にある説明文に次のようにあります。

『このナイチンゲール像は、岡山市吉備津に所在する宗教法人「福田海」(ふくでんかい)の創立者、中山通幽(つうゆう)が晩年を病んで大阪日赤病院に治療中、献身的な白衣の天使に、深く感激し、その感激を後に残さんものと造像の願いを起こした結果、一九三六年(注:昭和11年)この地に建立をみました。像の原型はロンドンに立つ女史の像で、世界にただ二基という珍しいものです。台座の「救苦観世音」の仏名は、女史の偉大なる博愛の精神と仏教の慈悲とが相通じる意を表し、当「福田海」では観世音としてこれを崇め信仰を捧げています。

宗教法人 福田海蓮社主記』

川西市観光協会などのHPによると、この像が

たてられたのは1936年8月13日。もとの像は英国ロンドンの聖トーマス病院内ナイチンゲール看護学校にあります。右手を胸のあたりまで上げて、灯を持った約175cmの等身大の像。ともしびを持っているのは、ナイチンゲールがクリミア戦争に看護に行った際、夜間に病室の病人を見回った姿に基づいているそうです。

ナイチンゲールの誕生日である5月12日に毎年ここで、川西市赤十字奉仕団主催の生誕祭が行われます。今年2019年にも、生誕祭が行われました。市立川西病院その他から看護師10人前後、市長の越田謙治郎氏、赤十字関係者、県議市議らが参加されました。

銅像を建てた中山通幽という人は、宗教家で福田海という宗教を始めた教祖です。明治の末から昭和の初めにかけて活躍。教義は神道・儒教・仏教・道教を折衷した内容だそうです。さてこれらの話を調べていくうちに、ある感懐にとらわれました。以下は裏付けのない単なる空想です。

この方は、ナイチンゲールの像を建てるために、遠路ロンドンにまで行ったのでしょうか。当時は飛行機などない時代。長い船旅。銅像の詳細な設計図も持ち帰ったのではないのでしょうか。並大抵な苦勞ではなかったと思います。

ふと思い出しました。キリスト様のお言葉です。ルカ福音書17章11節以下に次のように書かれています。

重い皮膚病(ハンセン病)の患者10人が、通りかかったキリスト様に「治してください」と大声で訴えます。キリスト様が「祭司に体を見せなさい」と言うので、彼らは行くと、途中で全員癒やされます。

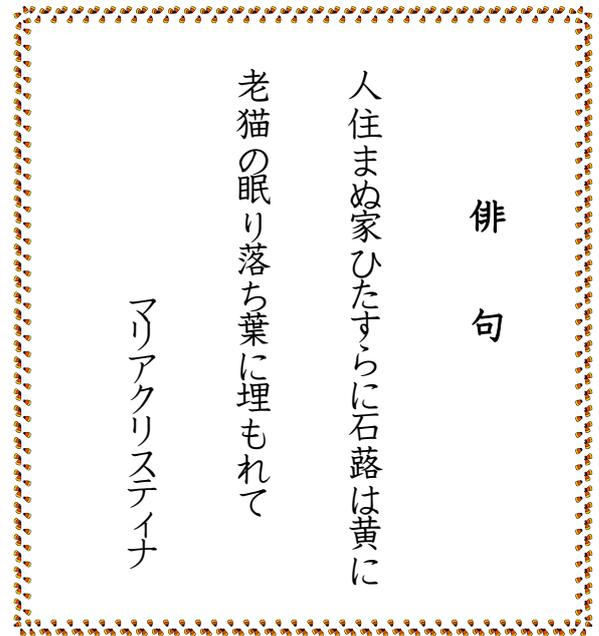
「そのうちの1人は、自分がいやされたことに気づき、引き返してきて、大声で神をほめたたえ、イエスの足もとにひれ伏して感謝した。彼はサマリア人であった。そこで、イエスは仰せになった。『清くなったのは10人ではなかったか。他の9人はどこにいるのか。神を賛美するために帰ってきたのは、この1人の他国人のほかにもにだれもないのか』。それからイエスはその人に向かって、『立って行きなさい。あなたの信仰があなたを救ったのだ』と仰せになった」。

カトリックであることを誇りとしている私。一応、標準以上の信仰がある、品性もあると自負している私。それが何と！異教徒の宗教開祖より感恩の情に乏しいとは！仮に臨終に臨んで、異教の開

祖、中山通幽氏とカトリックを奉ずる私が、同時にキリスト様から生涯の判決を受けるとすれば、キリスト様はおっしゃるかも知れません。

『通幽よ、お前は、わが正式なカトリックの教えを受けなかったにもかかわらず、恩に感ずる気持ち、天晴れなものがあつた。ゆえに天国に入るを許そう』と。そして私に向かっておっしゃるかも知れません。『利郎よ、お前はカトリック教会から、私の正式な教えを受けたにもかかわらず、不届きであつた。「喉元過ぎれば熱さを忘れる」ごとき忘恩の気持ち、しばらく煉獄の火に焼かれて罪の償いをせよ』と。

神よ、わが忘恩を、是非直してください。またあの看護実習生が、立派な医療関係者になりますように。たとえ報酬が少なくても、人に善を施すことで、あなたから頂く喜びに満たされる看護師になりますように。アーメン。



#### 年間カレンダーに追加・変更された行事予定

1月1、2日、3日 11時～ 正月ミサ

1月9、16、23、30(木) 10:30～

聖書百週間

1月10、24日(金) 14:00～16:00

福音書を学ぶ会

1月のガラスケースのことは

いと高きところには栄光、神にあれ、  
地には平和、御心に適う人にあれ

ルカ 2・14

## 大人の日曜学校 11月17日

「わたしの名のために、あなたがたはすべての人に憎まれる」  
(ルカ 21:17)

以前、キリストの教えと人間教育について少し触れましたが、この週のわかち合いの箇所には「あなたがたは親、兄弟、親族、友人にまで裏切られる」とあります。では、この冷厳なイエスの言葉と人間育成との間にもそうした関係性は存在するのでしょうか？私はひとつにはそこに人間の「実存」が問われているのではないかと考えています。「実存」とは、ある状況において「自分はどうかあるべきか」を自分自身に問うことと私は受けとめていますが、そんな中、人間の態度や生き方を示してくれるものとして、いまの自分にとって「貧しき者は幸いなり」というキリストのみことばがあります。そして、その原体験ともいえるような出来事のことを最近よく思い出すのです。

それは自分がまだ20代だった頃、教会関係で知り合ったある年上の友人に、「これから合宿に行くぞ」とだけ告げられ、何も分からずに真冬の極寒の中、JR線に乗って一緒に和歌山へと向かった時の事です。その「合宿」の目的地は「福音の小さい兄弟会」というあまり聞き慣れない修道会でした。和歌山駅に着き、しばらくして、向こうからオンボロの軽自動車が出て来たかと思うと、中からニコニコした表情の初老の男性が降りてきました。男性は「マサルさん」という愛称で周囲の人から呼ばれていて、Gパンにジャンパー姿という質素な身なりでしたが、ちゃんと叙階もされた神父様ということでした。それが私にとってのイエスのみことば「貧しき者は幸いなり」との出会いでした。

で、そこから向かったのは古い木造アパートの2階の一室。なんと、そこが修道会の施設でした。その修道会施設にはマサルさんを含む2名の方が住んでいて、部屋には6畳ほどの狭い畳の空間に小さな祭壇、物干しに出るとトイレがありました。それも水洗トイレではなく、汲み取り式です(といっても、平成の時代の話です)。彼らは平日昼間は獣の皮を鞣(なめ)す工場で働き、そこで受け取った賃金で修道会の家賃を支払い、自分たちの食費や生活費を賄(まかな)い暮らしていました。それが私にはカルチャーショックでした。

その修道会で何泊かしたある日、私たちは地域の古い神社で開かれていた「市(いち)」に行こ

うということになり、そこでしばらく私はマサルさんと二人だけになる時間がありました。「中上健次の小説のような世界ですね」そう私がいうと、マサルさんは嬉しそうに顔をされていたのを今でも思い出します。

「わたしの名のために、あなたがたはすべての人に憎まれる」、これも重い言葉です。ですが、そうした状況にあっても「自分はどうか」を問われている限り、それでもキリストに従う覚悟を持つこと、そしてマサルさん達にも受け継がれた「貧しきものであれ」というイエスの教えに、簡単ではありませんが、自分もその末席を汚す者でありたいと願う次第です。

研修委員会

## 宝塚黙想の家から黙想会のお知らせ

### ■ 日帰り黙想会

1月23日(木) 10:00 ~ 15:30

指導: 染野治雄 神父

1月24日(金) 10:00 ~ 15:30

指導: 染野治雄 神父

### ■ 週末黙想会

1月はありません。



各黙想会、費用等のお問い合わせは「宝塚黙想の家」まで。 ☎0797(84) 3111

## 編集後記

仕事中は良いとして、夜中や休日はついSNSを見たり、テレビを見たりして時間を無駄にしまいがちな私。その日の終わりが近づくと、一日の時間の使い方を後悔し始める体たらくである。そんな私だが最近、時間管理を聖書で学べると聞いて、実践しつつある。最初に意識すべきなのは、「わたしたちは、わたしをお遣わしになった方の業を、まだ日のあるうちに行わねばならない。だれも働くことのできない夜が来る」(ヨハネによる福音書9章4節)ということ。与えられた貴重な時間を最大限に実りあるものにできますように。

パウロ